

# 文学・観光・歴史

－遠藤周作・原城跡・小西行長を中心に－

大 國 眞 希・佐 島 顕 子

## はじめに

文学世界を地域に開いていく試みは、「五足の靴」を発掘した野田宇太郎が1951年に発表した『新東京文学散歩』がベストセラーとなり、文学散歩を確立して以降、現在に至り、さまざまな形が試みられている。2017年3月に小倉北区京町に文学の街、北九州発信事業の本拠地となる北九州文学サロンが開館されたことは記憶に新しい。そこでは観光町歩き案内などの情報が提供され、同人誌などの書物が置かれ、読書会や講演会などの文芸活動が行われ、文学から伸ばされた観光をひとつの核として、街やひとつをつなぐ場となっている。

一方で、文学などの舞台となった場所を訪れる行為が、アニメなどにも応用(?)された、「聖地巡り」「聖地巡礼」と称されるおこないも一般に浸透してきた<sup>1</sup>。アニメの世界は「2次元」と呼ばれ、「2次元」で表現された人物

---

<sup>1</sup> アニメ聖地巡礼と戦国史蹟巡礼について「聖地」側（ホスト）と「巡礼者」（探訪者・ファン）が生成する文化現象や相互に生じる緊張感については、由谷裕哉・佐藤喜久一郎『サブカルチャー聖地巡礼』（岩田書院、2014）に詳細である。特に「巡礼者」と、「おもてなし武将隊」や立花家史料館などの博物館・史料館との協働作業によって「聖地」が作られ、あるいは葛藤が内包されることについてはこのフィールドワークを企画実施する時に示唆されるところが多かった。

を恋愛対象であると誰かに話したとしてもそれほど奇異な眼で見られることなく受け入れられるようになったのではないか。更には、「2次元」であるはずのアニメの舞台化を、通常の舞台と区別して「2.5次元」と呼ぶ現象も起きている。唐津で育ったアイススケーターを主人公とし、唐津が重要な舞台ともなるため、「聖地巡り」をする視聴者が少なくないことを受けて（旅行者4万人到達を祝って）、人気アニメ「ユーリ!!! on ICE」の勝生勇利が2017年11月29日に公式の「聖地巡礼ツアー」において市長より唐津の観光大使に認定された話題がSNSを賑わせもした。

このような事象を背景として、文学をより有機的に、活発に文学から人、街へと開いていく活動、文学と観光とをつなげてゆく試みのひとつを考えるために、本稿では、遠藤周作などの切支丹文学、その舞台であり潜伏キリシタン関連遺跡のひとつとして世界遺産の登録も目指された原城跡などの場所、及び遠藤周作の小説に登場する歴史的人物小西行長、「熊本城おもてなし武将隊」(kumamoto-bushoutai.com)のひとりとして活躍する武将小西行長<sup>2</sup>を中心としておこなったフィールドワークの実践を報告する。

## 文学の場と音の記憶

フィールドワークに参加する前に、学習者たちは芥川龍之介「悪魔と煙草」、  
「神々の微笑」、遠藤周作「沈黙」、  
「銃と十字架」、  
「切支丹の里」、  
「鉄の首枷」を読んでいる。芥川作品では文学サウンドマップを行い、切支丹文学に

---

<sup>2</sup> 「熊本城おもてなし武将隊」は熊本城総合事務所管轄下で設立され、「400年ぶりに甦った歴史的人物」10名が観光活性化のために、観光客との交流、演舞披露、歴史・文化・観光紹介、歴史文化教育を行っている。武将小西行長はキリシタン武将として遠藤周作切支丹関連作品を熟読して「かつての記憶を新たに」し、キリシタン史跡を精力的に探訪し、自身の死後の迫害下キリシタンの精神性までも探る人物である。雲仙地獄では湧き出す湯に指を触れて熱さを実感する、原城跡の天草四郎銅像に登る外国人観光客を見れば声をかけて制止する、メダイを口に含んだ原城の死者や転びキリシタンの心を自身の言葉になおす試みを行うなど、「400年前の記憶」を日々内実化している。

おける〈音〉の重要性についても体感している<sup>3</sup>。そのうえで、鶏の声やアンジェラスの鐘などの切支丹文学空間における意義（象徴性）などを論じあった。遠藤周作の「沈黙」の空間を注意深く（そこに飛ぶ蠅や櫛の音、動物たちの声も十分に意識し）作品を読み込んでもある。そのような読書体験が生かされたのか、「銃と十字架」の結末に訪れる〈音〉については、読書会の段階でもその意味を論じようとする学習者が多くみられた。その結末とは以下のようなものである。

しめった秋草の下はかつて有馬新学校があった場所である。寺を改造した小さな校舎がそこに創られた。口をそろえ、宣教師の教えるラテン語を発声するペテロ岐部たち生徒の声がまだ聞えるようである。はじめて弾くオルガンのつたない響きもどこからか、耳に伝わってくる。紺色の着物を着て校舎から出てくる少年たちも眼に見えるようである。やがて自分たち一人一人に危険な悲劇的な運命が訪れるとは、これら少年たちも教師である宣教師たちもまだ気づいていない。

いつ来てもこの廢墟は静かだった。訪れる人影もなかった。むかしここに小さな学校があり、ここそ日本人がはじめて西洋を知った場所だったとはほとんどの日本人は知らない。ここで学んだ者たちがその学んだことゆえに迫害され、殺されていったこともほとんどの日本人は知らない。ここで学んだ者たちのなかに我国最初のヨーロッパ留学生の何人がいたことも、ほとんどの日本人は知らない。だからすべてが静かである<sup>4</sup>。

---

<sup>3</sup> サウンドマップは、ネイチャーゲームや学習プログラムの一環として使用されている記録方法で、文学サウンドマップはこれを文学作品で（文学空間のなかで）行うもので、国語科教育での使用が期待される。文学サウンドマップについては大國真希『国語科指導法の理論と実践―消失点と文学サウンドマップを基点に―』（溪水社、2017）も参照されたい。

<sup>4</sup> 遠藤周作『銃と十字架』（中央公論社、1982）

この結末を想起しつつ、有馬神学校跡において、その場で聞こえてくる音に耳を傾け、座標に書きいれてゆくサウンドマップをおこない、「銃と十字架」の読みがどのように変化したか、学習者は感じたこと、考えたことを記した。

#### 【有馬神学校跡でのサウンドマップ作成】



以下、学習者たちの記したことを紹介する。

「だからすべてが静かである」の一文に対する印象が変化しました。サウンドマップの前は「静かである」の一文通り、その場面全体に静かな印象を受けました。しかし、サウンドマップの後読むと、「静かである」の一文にも存在の音を感じるようになりました。」と書いた学習者Aさん。どのように変化したのか、どのような「存在の音」なのかは具体的には記述されていないが、「静か」にも「存在」を感じるようになったとの変化の意味は小さくない。「印象」や「感じる」から更に一步進めて、言葉によって考察し、それを表現できるようになれば、言語活動の見地からも更に深い学びとなるであろうと期待される。

学習者Bさんは「サウンドマップをおこなって、今はこうして、鳥のさえずり、車の音、人の暮らしがおだやかだけど、平和に感じるが、今も昔もか

わらない差別があること、おだやかな生活で忘れがちになるが、今もどこかで差別があっているかと思うと、平和が怖くなりました。また、平和とは何かと考えました。人々が平等で、よりよい暮らしができることだと考えています。一部の人が平和だと思っても、他の人がそう考えていなかったら、その平和は偽りにすぎないと考えます。知らないことを知る、差別があったことを知ることが大切だと思いました。」と書いた。音を聞き、空間を（現在、文学と輻輳的に）知ることにより、現在の自分にひきつけて、問題を考えている姿が見受けられる。

学習者Cさんは、「行く前に読んだ音のイメージと実際に行って聞いた音にあまり変化はなくて、読んだイメージでは「静か」の中に、「生徒の声」や「オルガンのつたない響き」のようなあたたかさと「悲劇的な運命」という悲しさ、みたいなものをイメージしました。実際に行ってみると、小鳥のさえずりや葉がゆれる音などあたたかいものと、そのあたたかさの中にさみしさみたいなものがあるような気がしました。そのさみしさもどんよりと暗いものではなくて、不思議と爽やかなさみしさで、あたたかさの中にさみしさが含まれているような印象を受けました。」と書いた。文学の中の空間と、現実の場とを重ねて考察しようとしている姿勢が窺える。

学習者Dさんは「文章の中に静かだったとあるが、サウンドマップをしてみて、「静けさ」は一通りでないと感じました。本を読んだだけだった時「静か」は何の音もなくただ、そこに学校というものがあつたとしか考えられなかったのですが、行ってみて、音を聴いてみると、鳥の鳴き声や車の音、風の吹いた音や草が揺れる音など耳をすませば色々な音は聴こえました。このことから、ここの「静か」は完全なる静かさではなく、生命をはぐくむ音が聞こえる「静かさ」だったと思いました。落ち着ける場所であり、何か考えさせられる場所でもあるように感じました。」と書く。

「私は『銃と十字架』にある「静か」とは、まったく生命を感じさせないことだと思っていました。または、ただ単に人の気配がほとんどしなくなってしまったのだと感じていました。しかし、サウンドマップを行って、鳥の

さえずりや虫の声といった生命を感じさせる音や車のエンジン音といった人の気配もしました。当時どのような状態だったのかは分かりませんが、この体験から「静か」とは、命の有無や訪れる人の有無だけではなく、この場所がどんな場所だったのか理解している人の有無も含まれているのではないかと考えました。その場所の存在が忘れられる、すなわち存在の死も「静か」になった原因なのではないかと思いました。」と書いた学習者Eさんの姿は、自身の「場」の経験をいかし、今一度、文学の世界を捉え直そうとしていると指摘しうるだろう。

「聴こえてくる音も流れる空気も穏やかで、時間が経つのがとても遅く感じました。「やがて自分たち一人一人に危険な悲劇的な運命が訪れるとは、これら少年たちも教師である宣教師たちもまだ気づいていない」とあるように、ここに居れば私もずっと死なないような気がしてしまいました。」と書く学習者Fさんは、実際の「場」を通じて、文学の空間に入っていきかのような体験をしている。

学習者Gさんは「有馬神学校跡に実際に行ってみて思っていたよりも何もなくて、何も知らないで意識しないで通ったら、きっと見過ごしてしまっているだろうなと感じた。だからこそ、ここに深い歴史があるということをはとんどの日本人が知らないというのには納得した。「だからすべては静かである」と書かれているから森林の中のほこらみみたいな場所なのかなーって思ってたんですが、住宅のすぐそばで、思ったよりも音が聞こえてきました。聞こえる音は人工の音というより、鳥の声、虫の羽音などの自然の音が多く、やっぱり「静か」ということは音がゼロではなく、自然の心地良い、耳障りの少ない音はある状態なのかなーと感じた。私達はたまたま遠藤周作の作品を選び、いくつかの作品を見てきましたが、その機会が無いと私も知らずにいました。たまたま私達が『銃と十字架』を選び、有馬神学校跡へ行き、ここでおこったことを知ることができたけど、きっと日本全国このように、「すべてが静か」なところが存在していて、知らない場所がきっとあるんだろうなということに気づかされました。教科書に書かれている歴史だけがすべて

を伝えているのではなく、そこにかかれたかったできごと、人々の思いに気づくことの大切さをあたためて感じとった」と書いた。

学習者Hさんは「とても静かな場所だと思いました。長崎に日本人がはじめて西洋を知った場所と言えるような小さな学校があったとは今まで知らず、実際に訪れてみても、住宅に囲まれ、ひっそりと佇んでいるその廃墟がかつて西洋を学ぶ少年たちの集った場所とは思えない気がしました。『銃と十字架』で有馬神学校跡について読んだときはもっとここに校舎があったとわかるような何かがあるように思っていましたが、そこに校舎が残っているわけではなく、石碑があるだけでした。また、そこは私が想像してた以上に静かな場所でした。主に聞こえてくるのは鳥の鳴き声であり、人々はそんなのどこかな場所で、ラテン語を発声したり、オルガンを弾いたり、きつと穏やかに生活していたであろうと想像でき、そんな人々が危険な悲劇的な運命に見舞われたというのは、より一層残酷さを感じられました。」と書いた。

学習者Iさんは「有馬セミナリヨ跡は思っていたよりもずっと小さくて、また道路の横にあったので驚きました。周りも普通の田舎の住宅地という感じでイメージと大分違いました。聞こえてくる音は、鳥の声や木の葉が揺れる音、車の音ぐらいで静かなものでした。かつてここが学校で、数多くの少年たちが西洋のことを学んでいたとは信じられないくらいの静けさでした。この学校で勉強していた少年たちは毎日どんな音を聞いていたのでしょうか。もしかしたら、鳥の声や葉っぱの音ぐらいは、私たちが聞いたものと同じだったかもしれません。しかし、そんな静かな場所でも車の音は当たり前聞こえてきます。私はそれに時間の長さを感じました。私たちにとって車の音は日常の中でよく聞く当たり前のものですが、当時のセミナリオでは絶対に聞くことのないものです。少年たちが聞いたことのない音を、現代の私たちは日常で聞いている。それほどまでの時間がこの場所では経っているのです。幸いなのは、ここで聞こえてくる音が全て平和を表す音だということです。私たちと同じように当時の少年たちも未来の悲劇など知らずに、この場所で平穏で当たり前の音を聞きながら、自分たちの夢のために頑張ってい

たのだとそう考えました。」と書く。

これらの活動及びふりかえりを、作品の中にあった場所をあたかも記号のように考え、その場所に立てば答え合わせが出来たと安堵できる、そのような一方通行で静的な訪問ではなく、その場に立つことによって得られる自身固有の経験によって、更に作品の理解を深め、考察をしていけるような、文学—場所—自分（ひと）のあり方を考えるための糸口としていきたい。

## 悲劇の舞台と観光

遠藤周作の『切支丹の里』には次のような一説がある。

加津佐をすぎ、島原の乱の原城跡を訪れる。ここもひどく変っている。昔日のいかにも原城らしい荒涼とした風景が俗悪な十字架やアスファルトによる公園化ですっかりこわされているのだ。話をきくと国体があった時、ここにお偉い方が来られるので、城の道もアスファルトにしたのだと言う。いい加減にしろという気持である。こういうものの保存の仕方市や県庁の連中だけの趣味をふりまわされてはたまらない。なぜ長崎県の芸術家たちはこんなにうつくしい風景と歴史をもった自分たちの故郷を次々と破滅するやり方に反対しないのだろうか。私にはわからない。(中略)

城の廃墟もこのただ畠と石垣しか残っていない——しかし日本の文化史上欠くべからざる一点だったこの城の跡がいつまでもこのままだることを、ただ、誰にも知られずに残ることを願うのは私の利己主義であるろうか<sup>5</sup>。

学習者たちには「誰にも知られずに残る」と書いてしまうことで、読者に

---

<sup>5</sup> 遠藤周作『切支丹の里』（中央公論新社、1974）



文学・観光・歴史－遠藤周作・原城跡・小西行長を中心に－（大國・佐島）

知れ渡るといふ矛盾を抱える記述とも指摘されていた。原城跡は世界遺産に登録しようとする動きもある。私たちは文学から観光をどのように考えられるのであろうか。これらのことを考える活動となるように、フィールドワークでは熊本城おもてなし武将隊の武将小西行長に案内役をお願いした。

#### 【原城跡での武将小西行長の解説】



フィールドワークの後に、実際に原城を訪ねて、観光化をどのように考えるか、悲劇的な場所を観光として訪ねることについてのどのような観点を持つか、記述した。

学習者Aさんは「原城にあった大きな十字架が観光地としての原城をあからさまにしている印象を受けました。しかし、その十字架もところどころさびている部分が見られ、十字架に対して歴史を感じるもの、というよりも荒廃したものというようにとらえました。そこから十字架の存在が観光地としての原城のシンボルというよりも、むしろただの「ここが原城跡である」という目印のようなものだと思います。一方で、天草四郎の像、大きな十字架、海を向く地蔵（十字架との対比）など観光地とするための要素も十分含まれているなどと思いました。また、原城の一部？付近？にネギ畑があったり、提

灯があったりしていたので、一般の人々と共同化？共有化？されているなと思いました。遠藤周作は原城を「こわされた」と表現していたけれど、それは芸術家の視点であって、市や県庁の人々にとっては、歴史を残す方法であって、原城の残り方は誰から見たかによって、どうなってしまったのかが変化するなと思いました」と書いた。

学習者Bさんは「原城を訪れる前は遠藤周作のいっていることにとっても共感していたけれど、実際に原城を訪ねてみると、思っていたのとはちがっていて、私は十字架があることによって、この場所が意味のある場所なのだと知ることができるのではないかと思いました。」と書いた。

学習者Cさんは「原城を訪れた事により、天草四郎達が海をまたいだ国を（人達を）待っていた事が伝わってきました。」と書いた。

学習者Dさんは「武将小西行長様に連れられ、原城を訪れてみて、正直、不思議な感じがしました。なぜなら、悲劇的な結末で幕を閉じた場所に、勉強とはいえ、そこが観光地となって、その場所へ足を運ぶということにもものすごく複雑な感情を持ったのが正直な気持ちでした。しかし、原城はとても空気もよく、気持ちいいなと感じました。武将小西行長様と行けて、タイムトリップしたかのように思えて嬉しさもありました。結果的に、私は今まで知らなかった場所だったので、観光とはいえこのような場所を知ることができたのは私的にはとても良い社会勉強になりました。歴史ある場所に手を加えるのは良くないと思うので、そのままの姿で残してほしいかなと思いました。」と書いた。

学習者Eさんは「最初は、遠藤周作のダークツーリズム批判にあまり理解が及ばなかったのですが、まだ地面の中に埋まったままの故人の方々や凄惨な出来事のことを思うと、これ以上、他人に手を加えられたりすることなく静かにそおとしておきたい気持ちが分かりました。私たちにとっては観光地でも、多くの方々の「墓場」であることに変わりないのだと思いました。」と書いた。

学習者Fさんは「遠藤周作の『切支丹の里』を読んだときは、私も悲劇的

な場所を形を変えて観光地化してしまうことに憤りを感じていました。しかし実際に訪れてみると、原城跡はそこに馴染んでいる気がしてあまり観光化されているようには思いませんでした。自分がそこはどのような場所なのかを知った上で行っているからかも知れませんが、どこか厳肅な雰囲気さえ感じました。」と書いた。

学習者Gさんは「今回、原城や天草を訪れてみて、決して楽しいような気持ちにはならなかった。目をそらして忘れたいようなことでも、歴史として、事実として知る必要があると思う。大抵の人が研究者のように専門で学ぶということはできないと思うし、必要性もないと思う。だからこそ“観光”というものから事実に向けるというのは、悲劇を忘れず、二度とないようにと思える身近な手段であると感じる。そうやって多くの人が知り、悲劇的な場所も残っていくと思うし、歴史も残っていくと思うので、悲劇的な場所を訪れるのも大切だと思う。」と書いた。

学習者Hさんは「原城は草木に囲まれていて、何も知らなければここにたくさんのお骨が埋められているなんて想像できないと思いました。でも、これがきっかけで原城の歴史に少し興味を持ったり、想いにひたれる時間があつたらいいのにと思いました。悲劇的な場所だからこそ、その中に咲いている花がよりきれいに見えたり、少しの幸せを見つけることができると思いました。」と書いた。

学習者Iさんは「小西行長が実際に処刑された場所に、何も知らずに見にくるカップルがいる話をされていて、ただ楽しい観光地なのではなく、原城跡は悲しい歴史のあった場所で、自然のまま残った姿をみて、歴史を知っている人に語りかけてくる場所だとわかりました。」と書いた。

これらの学習者たちの記述については、分析のしかた、あるいは問いの立てかたによって、さまざまな考察を得ることが可能であるが、遠藤周作を読み、「熊本城おもてなし武将隊」の武将小西行長が案内をしてくれていたことによって原城が歴史を含んだ場であると体験できた点は指摘しておきたい。

原城跡では、悲惨な歴史をもつ原城が観光化されることの意味を考え、そ

の空間の多層性に空気全体で触れた。有島神学校跡では、『銃と十字架』の結びにある「静けさ」の豊饒性を感じ、音を結 endpoints として、サウンドマップを行い、小説の終わりから物語の場に分け入り、より深く考える活動を行った。遠藤周作は長崎を歩きながら「声ならぬ声に耳を傾けることができるのは文学だけだ、それが小説を書くことの意義だと考えた」と『切支丹の里』に書き記している。いわゆる歴史の教科書に掲載されない、武将小西行長の言葉を借りるならば「関ヶ原で敗れた拙者には文書など何も残るものがない」と言われるような<声ならぬ声>に耳を傾けることもまた、文学の存在意義であり、場における大切な行為となろう。

## 文学と歴史と観光の立体的な交差と受容

近年、講義していると、学生たちは一般に「昔の人は現代のような便利な生活ができなかったので、つまらない時間を過ごしてただけ」と見ていることに驚かされる。「昔の人にもそれぞれの人生があり、その重なりの上に現代がある」という前提がなければ、「昔の人の叡智（書籍・文献）に学びたい」というリベラルアーツの姿勢を持たせにくい。

そこで「昔の人も我々と同じように考えて悩む人間たちだった」ことを実感させるツールとして、歴史的人物になりきった「おもてなし武将隊」という存在に注目した。「武将隊」は全国各地に30団体ほど存在するが、「熊本城おもてなし武将隊」では武術・所作・舞踊・話術・観光知識が必須のうえ、「歴史教育ができること」という条件も重視されている。

日ごろ彼らは熊本城の観光施設・桜の馬場城彩苑を拠点に活動しているが、依頼があれば各種イベントのほか、幼稚園・保育園・学校や市民講演会にも出陣する。2015年福岡市博物館『大関ヶ原展』では、武将本人が当時の記憶を語り研究者が歴史的意義を解説するという新しい歴史講演会スタイルを提案した。そこで2016年には本学に三武将と山本博文東京大学教授を招聘して同様の大学公開講演会を開催した。現代ではTV歴史教養番組にも俳優によ

る再現ドラマが挿入されることから、そのライヴ版として学外からも注目された。学生からは「武将たちの生の声で『なぜそうしたのか』を語る昔の話にはとてもワクワクし、戦国時代も人が生きていたんだという実感を得た」という声が出た。そして主講師山本博文教授をして「武将たちは非常によく勉強しています。いえ、昔のことを記憶していると言うべきでしょうか」といわしめ、武将の歴史的素養の深さも認められた。

そこで本フィールドワーク中に、『鉄の首枷 小西行長伝』を題材に本人としての解説と語りを依頼した。武将と教員側の事前打ち合せでは、学習者のこれまでの取組みを説明し、時間配分を決めるにとどまり、武将への資料提供や語りに関する要望は行っていない。武将小西行長が記憶する（解釈した）本人像や史実について、すなわち『鉄の首枷』を本人の言葉として聞いた時に、学習者がタイムスリップしたように作品を自分のものとして感じることを期待したゆえである。

その結果、武将小西行長はノートやメモも見ず、史料的裏付けのある内容と思いを行長本人の言葉で語った。『鉄の首枷』を上回る歴史的史料も用い、「キリスト教徒になって良かった」と言いきり、その根拠として自らの遺書を紹介して「人は裏切るが、真理は存在する。神に仕えよ」という言葉で締めくくった。

以下、武将小西行長の自己紹介・質疑応答・まとめの一部を掲載する。そして彼の語りから歴史的意義を再検討してみたい。

### 武将小西行長：

皆々は『鉄の首枷 小西行長伝』を読んだのじゃのう？ うむ、どうじゃった？ 面白くなかったじゃろう。あれが面白く読める者は、小西行長が好きか、キリスト教の日本における歴史が好きか、そういう者たちではないかと思う。説明文も長く歴史の説明も非常に難しい。当世の若い人たちには全然面白くなかったかもしれぬ。それにも関わらず拙者の伝記物語を読んでくれて心よ

り礼を申す！

挨拶が遅れたが、拙者は小西摂津守行長と申す。京で生まれて堺で育ち、秀吉様の政権で重責を担い、肥後国……当世の熊本県を加藤清正と2人で分けて治めておった。肥後領主は加藤清正一人だと思われがちだが、拙者もおった。関ヶ原の戦いで拙者の西軍が負けてしまったゆえ、加藤清正が一人で治めることになったのじゃ。すなわち拙者がいなければ、秀吉様の代官だった清正が抜擢されることもなかった。それほど素晴らしい人物が拙者である！

(笑)

秀吉様亡き後、その遺志を継いだ政治を守ろうとした西軍は敗れたので、西軍代表格だった石田三成や拙者は、京都の六条河原で大勢の人が見る前で斬られた。家康はそうして豊臣の世が終わったのを見せつけたのだな。拙者は400年ぶりに、あの時と同じように口ザリオを握って行って見たことがある。すると、なんと大勢の若き殿と姫がそれぞれぴったりくっつきあって座っておった！「何を考えて、おぬしらはそこに居られるんじゃ？そこは拙者が首斬られた場所だぞ？」勿論当世の者が仲良きことは喜ばしい、ただ、そこに歴史があることは知っていて欲しいと思うぞ。

ほかには、天草四郎は拙者の家臣の息子じゃな。あとは日本では知られていないようだが、イタリアのジェノヴァという町では、拙者のオペラも上演され、拙者はむしろ西欧で名を知られておった。

さて、今日は、皆々が何に興味があるかと話を考えては来た。だが皆々と問答をしたほうが互いにわかり合えるかもしれぬ。拙者に尋ねたいことがある姫はおらぬか？

六条河原は反逆など大罪を犯した者が斬首される場であったが、その河原がデートスポットになった違和感について、武将小西行長は学生に考えさせた。

文学・観光・歴史－遠藤周作・原城跡・小西行長を中心に－（大國・佐島）

オペラについては、1607年にジェノヴァで『日本王アゴスチノ<sup>ツノカミドノ</sup>撰津守殿』というタイトルで上演され、1756年には『アウグスティヌス<sup>ツノカミドノ</sup>撰津守殿』という音楽劇が上演された<sup>6</sup>。宣教師が伝える報告書の内容により、小西行長は生前から「日本教界の保護者」として西欧で有名であり、その訃報が伝わるとその死がさまざまな形で惜しまれた。

Q いろいろな土地にいらしたと思いますが、どこが暮らしやすかったですか？

A 和やかな場作りに協力的な姫！最初に質問するとは天晴れじゃ、姫には褒美として禄を30石遣わそう！（笑）拙者としてはやはり堺を選ぶな。普通の町は大名が支配するが、堺はヴェネツィアのような商人の町だった。当世でいうと知事が商人ということになろうか。戦国時代なのに大名がおらぬ。商人たち自身で話し合っただけで町をまとめるので特別な力があり、戦場にならない。堺は日本でもっとも平和な町だった。

Q 戦さ場で戦略が立てやすかったところなど、印象に残っているのはどこですか？

A 戦略が立てやすかったなど、生涯1度もなかった。戦さ自体が普段と違い非常時だということはわかるな？刻々と状況が変わってしまうので、常に気を張りあらゆる可能性を考えるのが戦場だった。ただ、拙者個人として印象的な戦場はあった。皆々も織田信長様を知っておろう。武将の中の武将じゃな。拙者はあの方に一度だけ褒められたことがある！ちなみに秀吉様の下で年貢の計算ばかりしとった加藤清正は褒められとらん。というか存在すら信長様に知られておらんじゃったろう。当時は、織田信長様方と毛利が長い戦さをしており、秀吉様に仕えていた23歳の拙者は淡路島で秀吉様の味方を集めておった。すると毛利の怪しい船舶200隻ほどが淡路島目指して

<sup>6</sup> 幸田成友「小西行長とその一族」（『和蘭雑話』、1934）。田村襄次『小西行長』（中央出版社、1978）。

海に現れたのだ。それで急いで拙者が淡路島の船を率いて、「信長様と秀吉様の海に侵入するな！」と追い払ったところ、信長様が「あの凄い者は何やつじゃ？」と尋ねられ、蜂須賀様が「秀吉殿の配下の小西でございます」と言上したので、信長様が拙者のことをお褒めくださった、そのような書状が当世まで残っておる。

この戦は『鉄の首枷』発表当時はまだ知られず、近年の歴史研究が、11月6日付蜂須賀正勝宛織田信長黒印状写（蜂須賀文書）で信長が「室より小西・安宅乗り出し、家島追い上げに至るの旨、尤も以て神妙候」と、行長を賞賛したことを明らかにした<sup>7</sup>。

天正9年（1581）当時、織田氏と四国長宗我部氏の手切れにより、信長の部将羽柴秀吉は因幡鳥取城攻囲戦のかたわら、淡路島と四国の国衆を織田側に確実に掌握する任を帯びていた。鳥取城を動けない秀吉は淡路・四国への指示伝達と状況報告の使者として小西弥九郎（行長）を選んだ<sup>8</sup>、遠距離で指揮する難しさから淡路島南部・志智城に黒田孝高を置いて現地作戦を指導させた<sup>9</sup>。その秀吉と孝高の間を使者として頻繁に往復していたのが行長だが、秀吉の指示が届く頃には現地状況は進んでいる。孝高は秀吉の真意を見抜いて臨機応変に動くことを行長に教え、これが秀吉と現地の間に置かれた人物が、適宜判断をしながら秀吉の真意を実現するという豊臣政権の特質の一つとなった<sup>10</sup>。孝高や行長が主君の意向を読み誤れば問責されるのでその責任は重い。これが武将行長の「戦さ自体が非常時」「刻々と状況が変わってしまう」という言葉に集約されている。

そんな折り、淡路島対岸の蜂須賀正勝が毛利軍船二百艘が淡路島北端の岩

<sup>7</sup> 鳥津亮二『小西行長』（八木書店、2010）。小川雄『徳川権力と海上軍事』（岩田書院、2016）。

<sup>8</sup> 9月10日付秀吉書状（大阪城天守閣所蔵）『豊臣秀吉文書集』1・486。『豊臣秀吉文書集』（以下『秀吉』）では天正10年に比定しているが、内容から天正9年である。

<sup>9</sup> 9月12日付黒田孝高宛秀吉書状（黒田家文書）『秀吉』1・487。

<sup>10</sup> 山本博文「家康の公儀占拠への一視点」『歴史学研究』530。



屋城に向かう情報を行長・孝高に伝えた。岩屋城は信長の瀬戸内制海圏を分断できる位置にあるので、急遽行長が淡路島国人安宅氏を率いて淡路島の室を出航し、宇喜多領境の家島まで撃退した。淡路島の海衆・安宅氏を信長側として参戦させ、毛利勢の岩屋城確保を断念させ、秀吉本隊の淡路・四国渡海を容易にした行長の功績は、信長が秀吉の陪臣小西の名をあえて挙げて賞賛するに値した。

行長は関ヶ原の戦いまで20年間多くの戦さと交渉を担ったが、秀吉の指示を待たずに軍功をあげた意義、信長にも名を知られた誇らしさは、「印象深い戦さ場」にふさわしい。武将行長が『鉄の首枷』で詳述されなかったこの戦さを挙げたのは、最新歴史研究成果を利用した、もとい「研究を参考に、400年前でおぼろげになった記憶を思い出した」結果である。

**Q** 今「熊本城おもてなし武将隊」で加藤清正様と一緒に行動している理由は何ですか？

**A** 加藤清正と拙者は相思相愛の逆で、宿敵といわれるほど不仲ではある。だがもともと同じ熊本の大名なので、当世で熊本や日本を共に盛り上げてもおかしくはなからう。実は拙者は関ヶ原の戦いで負けてしまった上に幕府が禁じたキリシタンだったので、残した文書や肖像画もほとんど焼かれて失われた。そのために誤解や誹謗中傷の嵐だった。せっかく宇土城跡に拙者の銅像を2千万円もかけて建ててくれた時も、多くの人から「銅像をたてる価値のない大名」だと非難され、拙者の銅像はトタン板にくるくる巻かれて何年も日の目を見なかったという胸の痛む記憶がござる。ただ最近になって正当評価が始まり、それで拙者のことを広く知っていただけるように当世で活動を始めたところが、加藤清正と同じ隊だったので、やむをえず！一緒に活動しておる。性癖が合わぬが仕方なくじゃ！皆々も学校や、勉強の合間に「臨時奉公」に行くと、気が合わぬやつが居るじゃろ、絶対？やがて社会に出ても相性の格別に悪い者が絶対居るが、皆々少々耐えて、そういう者たちともやって行って欲しいと拙者は願う次第だ。

天正15年(1587)、秀吉が九州を版図に入れて畿内に戻った直後、肥後の一部国衆が秀吉麾下の領主佐々成政に反乱を起したが、翌年政権は反乱を鎮圧し、佐々は引責自害となった。秀吉はその肥後の新領主として加藤清正と小西行長を抜擢して連携統治を行かせた<sup>11</sup>。蔵入地代官出身の清正が、肥後に反乱を起させず戦乱復興を行い、瀬戸内海で秀吉水軍を編成・統率していた行長が西九州海域領主を統合して秀吉の大陸出兵を準備した。二人の熊本城と宇土城が非常に近接しているのも、日常的な情報共有や連携のためであったと推測できる。

その行長と清正の不和は、天正17年の天草本渡城反乱への対応の違いによる。肥後においては清正も行長も中央政権から送り込まれた「他所者」で、彼らは国衆に襲われる危険を自覚していた<sup>12</sup>。そこで反乱拡大を危険視する領主清正は即時武力鎮圧を主張し、大陸出兵に地元海民利用を予定する行長は流血を避けた帰順説得を主張し、両者は激しく対立した。九州統治がまだまだ安定しないのに海外へ版図を広げようとした秀吉方針の矛盾が、両者の不和を招いたと考えられる。ただ、土の人間(蔵入地代官出身)・水の人間(水軍司令官)という個性の違いが、秀吉からそれぞれ違う任務を引き出したとも言えよう。

**Q 加藤清正様に恨み以外の感情があるとしたら、なんですか？**

**A おお、良き質問じゃ、刀を持って！恨み以外の…恨み・つらみ・そねみである！というのは戯言じゃ。拙者をどなたと心得る？歌劇にもなった世界の小西が、陰でちまちま悪口を言うなど笑止千万。しかも加藤清正と同じ場**

---

<sup>11</sup> 鳥津亮二、前掲書、81頁。

<sup>12</sup> 高野友理香「在日フランシスコ会士と小西行長—マルティン・デ・ラ・アセンシオンの報告書より—考察—」『うと学研究』38号。行長は後ろ盾の秀吉が死没すれば自分も九州で襲われるという予感から、巡察師ヴァリニャーノと何度も話し合いをしていた。小西家中の存続とともに、行長が保護するイエズス会とキリシタン教界の安全をどう図るべきかを検討していたと思われる。

所に置かれたのも神の御意志ゆえ、清正など相手にせぬ。

それで、あの清正でも良きことをしたのを皆々に教えるなら。拙者が関ヶ原の戦いの後で斬首された頃、宇土城を攻めていたのは清正だった。同じ肥後で隣の領主のくせに酷い奴ではあるが、宇土城を守っていた拙者の弟に「関ヶ原は西軍が負けたからもう開城しろ」と伝えた。それで弟は「自分が代表で切腹する代わりにほかの家臣は全部加藤家で同じ俸給で召し抱えてくれ」と条件を出したところ、清正は承諾して、拙者の家臣を皆受け入れて暮らしが立つようしてくれた。拙者もその点だけは清正に感謝しておる。

慶長5年（1600）東軍加藤清正は西軍小西行長の留守の宇土城を囲んだ。城代で行長の弟・小西隼人は開城を決意した時、自身の切腹を条件に家臣助命を求めたが「助命だけで浪人すれば結局落命するので小西時代と同じ俸給で全員を加藤家で召し抱えて欲しい」と要求したと「肥後宇土軍記」は記す。隼人の強気の内容提示は兄行長のしぶとい交渉術を思わせ、清正は応じた。理由は、行長も清正も小身から一気に肥後半国領主に出世したため譜代家臣が少なく、佐々成政旧臣や地元の国衆を分け合って抱えていたので、小西家臣に加藤家に移る抵抗がほほないこと、今後清正が行長旧領を支配するためには小西旧臣をそのまま使うほうが合理的なこと、小西旧臣を即戦力として加藤軍に編成して島津家と戦わせられるであろう。逆に清正が拒否すれば、行長旧臣は島津軍に参入するか清正領の治安悪化要因となり、清正にとっても望ましくはなかったであろう。

**Q** 好きな武将はいますか？

**A** 勿論おるぞ！石田三成、そして高山右近様じゃ。

高山右近様という、拙者よりも敬虔で熱心なキリシタン大名がおった。秀吉様から、キリスト教を棄てるか大名を棄てるか選べと言われ、何の迷いもなく大名を棄てると申された。誰にも出来ることじゃない！自分の意志を曲げず信仰に生きた凄い方だ。拙者もそのように生きたかったが、拙者まで

居なくなれば本当に困る者達が大勢出ることになる。宣教師達も、右近様の家臣も、キリシタンの民も、保護する者がいなくなってしまう。拙者には皆を保護する責任が御座る。高山右近様の生き方は憧れる。されど、拙者には同じ生き方は出来なかったのじゃ。

天正15年6月18日(1587)博多において秀吉は高山右近や小西行長など主なキリシタン大名に棄教を命じた。神田千里氏紹介の「1588年2月20日付フロイス書翰」によれば行長は秀吉に「はい」と回答した。この件につき行長はフロイスに「君主に対して、したくないとか出来ないとか回答することは日本では忌避すべき不作法であり、常に『はい』と回答し、後に本人自身か仲介者を介して、まだそうする勇気がある場合には困難を表明するか釈明を述べるのが習慣となっている」と説明した<sup>13</sup>。すなわち秀吉の棄教命令をその場で拒否するのは非礼の極みであり、棄教したくない場合は後日対策を立てるのが日本の慣習であり、行長は慣習通りに行動した。

この日本的慣習を念頭に置いて日本準管区長ゴームスが著したコレジヨの教科書『カトリック教理要綱』(1593年)の第3部17では、宣教師の迫害逃亡は禁じるが、日本人聖職者や一般信徒は「正直に答えたならば自分の身に危険が及ぶことが予想されるような場合には、信仰を隠したり 否定したりしても構わない」と教えた<sup>14</sup>。

すなわちキリシタン大名が秀吉に「はい」「御意次第」と即答したとしても、彼らが棄教したり嘘をついたりしたとは即断できない。信仰とは言葉ではなく、行動で示されるものである。

また棄教要求の趣旨が、キリシタン大名が秀吉の政治的権威を認めるか否かの確認なので、実は大名の宗旨は問題ではなかった。だからこそ秀吉はキ

---

<sup>13</sup> 神田千里「伴天連追放令に関する一考察：ルイス・フロイス文書を中心に」『東洋大学文学部紀要・史学科篇』37。

<sup>14</sup> 狭間芳樹「近世日本における聖書受容と文化／社会抵抗：キリシタンの殉教をめぐって」『関西学院大学キリスト教と文化研究』13。

リシタンで行長の父・立佐を堺奉行から罷免することもなく、むしろまだ立佐が水面下でキリシタンと繋がっているのを推測して右近と宣教師の行方を尋ねた<sup>15</sup>。

行長にとって秀吉のキリシタン警戒方針は、「またか」というぐらいの感想だっただろう。幼少時から京の教会に通っていた行長は、町内の投石から朝廷の宣教師追放令まで一通りの迫害を経験していた。行長にとって信仰と迫害は表裏一体で、迫害の予兆は常にあった。行長と父は町内の嫌がらせに耐えて教会に通い、宣教師追放令の文辞に逆らって宣教師を逃亡させて新たな有力者の保護を探した。そして迫害はいつも時間をかけて解決された。

そういう京の庶民の子として信仰生活を送った行長に比べると、高山右近はやや立場が違う。畿内で戦う国衆で、熱心な信仰者でもある高山飛騨守の嫡子として受洗した右近は領内の聖堂で安定した信仰生活を送った、いわばキリシタン王国のプリンスであり、迫害経験はない。ゆえに右近は天下人秀吉の政治的権威を相対化し、棄教拒否と領国返上とを即答した。これは右近なりの信仰告白である。

しかし秀吉としては、信長の横死を見て以来、人格者右近は裏切らないと信じて寵愛してきたところ、右近から「非礼の極み」の回答を返されたのは、「信仰者から見れば天下人に価値はない」という絶交宣言に等しい。体面も内心も傷ついたのは、追放される右近よりも秀吉であっただろう。さらにその夜、秀吉が詰問した日本イエズス会責任者コエリュも秀吉の政治的権威を理解できず「口答え」をした。

これが、18日段階の「大名・家臣の入信制限」から、19日の「宣教師追放令」に秀吉が政策をエスカレートさせた主因だと筆者は考える。

右近はひそかに博多を発ち淡路島に身を隠した。博多復興奉行の一人として物資・船団統制に関わっていた行長なればこそ、右近を小舟で能古島に送って湾外に出る大船に乗り換えさせること、過所（通行証）発給も可能であっ

<sup>15</sup> 1588年2月20日付フロイス書翰『16・7世紀イエズス会日本報告書』第Ⅲ期7（同朋舎）

ただろう。行長はキリシタン大名の代表として右近の旧臣らを引き取り、九州キリシタン地域の保護につとめた。

イエズス会宣教師の国外追放には行長も困惑しただろうが、当時圧倒的に司祭が不足した日本では何年も信徒の組（コンコラリア）を作って信仰を守る教会も多く、司祭不在に対処する体力はできていた。九州の戦国時代が秀吉によって終止符を打たれたことを理解できないコエリュは軍事力で秀吉と戦う対抗指示まで出た。が、イエズス会が秀吉の政治的権威を認めない限り秀吉政権下では居場所がないことを知る。行長としてはイエズス会を数年間マカオに戻し、日本の慣習に合わせられる指導者に代わった頃に秀吉と和解させることを期待したと思われる。

たしかに、この秀吉の禁令のため、苦心の末に建て上げた多くの教会や学校が閉鎖されることに行長は苦しんだと思われるが、行長は幼い頃から戦乱で教会やセミナリオが何度となく灰燼に帰し、キリシタンに好意的な有力者が次々に戦死して教会が保護者を失う現実を経験してきた。行長は失意と忍耐の人物である。

A 石田三成という男は、拙者はよく会っていたから知っているが、若い頃は非常に鋭くていい顔をしておった。今残っている肖像画は年をとった時のものだから、友としては、あれだけが三成の顔だと思って欲しくない。三成は当世の人には好かれてないようだが、誤解されがちな人物だな。だが「日本26聖人殉教事件」直前、実は京都のキリシタンは3千人以上おった。キリシタンを保護する拙者が三成に「大量処刑しないで欲しい」と頼んだら、本人はキリシタンではないのに、わが身も顧みず東奔西走して秀吉様を説得してくれた。三成は実に理を重んじる男で、拙者の信頼できる友じゃった。

『日本二十六聖人殉教記』<sup>16</sup>によれば、慶長元年（1596）秀吉が京坂のキリ

---

<sup>16</sup> 結城了悟訳・ルイスフロイス著『日本二十六聖人殉教記』（聖母文庫、1997）。

シタン捕縛処刑を命じた時、京ではキリシタン3千人以上が名乗り出た。天正15年の禁令以後「隠れキリシタン大名」が多かったため、誰がキリシタンかわからない状態である。そこで三成は「もし拙者がキリシタンだったらどうする」と役人を恫喝してまでキリシタン探索を中止させた。実際、奉行前田玄以の息子2人もキリシタンだと父親に表明するなど、探索を進めれば政権として取捨がつかなくなる恐れもあった。それで三成は秀吉に大量処刑は無理だと秀吉を説得し、処刑人数を最初に捕らえた二十数名までに激減させた功績がある。

ただその三成も最初はキリシタンや小西行長にむしろ敵意を持っていた。天正14年に三成が小西立佐とともに堺奉行になった際、堺の治安維持を名目に立佐の姻戚キリシタンの処刑を強行し、行長・立佐と鋭く対立した<sup>17</sup>。

それが変化したのは文禄役中である。秀吉の命じる明国への侵入が不可能だと悟った前線の行長は実情を石田三成・増田長盛・大谷吉継の三奉行に報告した。行長が提案する明との講和・朝鮮の前線後退を三成等は現実的路線として理解し、秀吉に追認させた<sup>18</sup>。行長と三成はこの時に政治外交路線が一致し、連携して実現に努めたため、関ヶ原の戦い・六条河原処刑まで共に行動することになった。

**Q 武将と信仰との折り合いをどうやってつけたのですか？**

**A** なんと良い質問ではないか！ 拙者はキリシタンだが秀吉様にお仕えしていたので、戦場で敵を死なせることも多かった。信仰と相反することをしていたわけじゃな。しかし秀吉様の下に踏みとどまらなければ、もっと多くの者が命を失う。拙者は常にその板ばさみだったが、その時その時、拙者にできる努力をなした。敵軍を攻撃する前に話し合いを呼びかけ、戦さが始まらないように誠意を尽くした。清正が敵の城に攻め込んだら、反対側の門に拙

<sup>17</sup> 松田毅一・川崎桃太訳注『フロイス日本史』第2部79章、中央公論社。

<sup>18</sup> 国重顕子「豊臣政権の情報伝達について－文禄2年初頭の前線後退をめぐる－」谷徹也編著『石田三成』（戎光祥出版、2018。初出：『九州史学』94号）。

者が突っ込んで敵の人々を外に逃がした。拙者は「このへんで折り合いをつけよう」と決めず、できる時にできることを行おうとしたということだ。

ほかには、武将は何かあれば切腹するのが当然だが、これは秀吉様にお仕えすることと関係なく拙者自身で決められる種類のことだ。それゆえイエスキリスト様にならって切腹をしなかった。なぜなら、イエスキリスト様もつらい中を通っても御自分で死ななかった。だから自死はしなかった。

前述のように天正17年天草の乱において行長は本渡城の開城説得を繰り返し、その結果を待ちきれずに突入した加藤清正の軍から城内の人々を救出し、当面の食料を与えた<sup>19</sup>。戦乱では城内の人々は殺されるか、捕われて人買商人に売られるか、城から脱出しても避難先がなければ行き倒れるのが普通であった。ゆえに、これは反乱者への行長の配慮であるとともに、その地元で反豊臣意識を植え付けないことを優先する行長の政治方針でもあった。

また文禄役の講和破綻後、秀吉は朝鮮再征を宣言した。行長は朝鮮との交渉を継続して秀吉の攻撃再開を制止する間、朝鮮軍と通じて諸大名の朝鮮渡海を牽制して不慮の軍事衝突を避ける努力を試みた<sup>20</sup>。

小西行長は、主君秀吉の意図を実現する過程で、軍事力を行使するより、つねに交渉を通じて外交結果を、秀吉の納得する地点に導く大名であった。

そして秀吉麾下の立場を離れた行長は、人命尊重に意を尽くした。孤児院・病院への多大な寄付をするほか、領主としても特異な点を持っていた。当時の家臣や下人は些細な過失でも主君に即刻斬られるのが普通だったが、行長は、3人の役人が調べて罪の有無を明らかにしない限り死罪としないこと、という法を自領で施行し、他の大名にも勧めた<sup>21</sup>。

宣教師史料の小西行長は、高山右近等のように敬虔な信仰生活を送ってい

---

<sup>19</sup> 松田毅一・川崎桃太訳注『フロイス日本史』第3部6章。

<sup>20</sup> 佐島顕子「『朝鮮王朝実録』収載日本人名にみる豊臣政権」（山本博文編著『科研基盤研究A報告書 法令・人事から見た近世政策決定システムの研究』、2015）。

<sup>21</sup> 1600年度カルヴァーリュ日本年報補遺『16・7世紀日本報告集』第I期3。



ると賞賛された記事もなく、多くの同僚を受洗に導いたという記事もない。彼の私生活は決して修道者的ではなく、政治家・外交官・武将として常に任務に追われていた。ただし孤児や病者や被災者など援助が必要な人々のために常に私財を投じ、戦争終結の道を探った記事は多い。信仰指針を心に持ちつつ秀吉麾下として働いた小西行長は、理想を心に秘めた社会人として妥協する時もあれば本意を通すこともある現代人にとって、共感を呼ぶ人物である。この小西行長こそ、真の「キリシタン大名」とも言えるのではないだろうか。

Q 『鉄の首枷』を通じて遠藤周作はどんなことを伝えたかったのだと思いますか？

A 小説の題になった鉄の首枷とは、徳川家康が拙者にかけての枷で、あれは長い時間非常に激しい苦痛に苛まれるものじゃ。

遠藤周作先生は、そんな拙者のことをなぜわざわざお書きになられたのじゃ？遠藤先生は大正生まれなのに、身長が183cmあったそうじゃ。拙者より3cm下で、当時の平均身長が160cmもいってない時代に、遠藤先生一人超人が立っているような状態だな。皆々がそういう立場で学校に通ったらどう感じると思うか？拙者の洗礼名アウグスティヌス。遠藤周作先生の洗礼名はパウロ。先生も拙者もキリシタンというわけじゃ。

遠藤先生は、軍国主義の時代に自分だけ敵方の連合国の宗教を信じていると周りから攻撃される、本人も他の者のような仏教や神道を信じてないから醒めている。また結核にもなって何度も手術して、普通の若者らしい暮らしができなかった。遠藤先生は仲間たちにはわからない十字架を持って堪えておられた。一方400年前の我等にも禁教令が出て、大名は己がキリシタンだと名乗れない時代だった。拙者が死んでももう少し後になると、キリシタンというだけで殺されていた。島原の乱が起きた要因にもなっておる。

そう考えると、遠藤周作先生は、拙者等の生きにくかった時代と御自身を重ねておられたのではなからうか。

遠藤先生も中学時代、母親の影響があったので、純粹に自分の意志で受洗したとは言い難い。ゆえに最初は嫌で敬虔なクリスチャンでなかった。そんな遠藤先生が拙者を知った時、「この者も敬虔なクリスチャンじゃなさそうじゃの」と思われたのではなかろうか、と拙者は感じる。拙者も親が受洗した影響でクリスタンになったので、自分から教会に行き始めて信仰を選び取った類ではない。

Q キリスト教徒になってよかったですか？

A よかったです！

では最後に、『鉄の首枷』、皆々ほどの部分に惹かれ、どのように読んだだろうか？

それで拙者が持参した『鉄の首枷』、これは初版であるが、うむ、40年前じゃのう。拙者の好きな部分を朗読する。実は秀吉様が亡くなったら、ほとんどの者が徳川家康の東軍になびいてしまった。拙者のことを信じて物凄い辛苦を共にしてくれて、同じクリスチানের同志だと信じ合っていた時からわずか2年。拙者の人望がないというより、徳川についたほうが安全だとその者たちは決めてしまった。その多くは後に徳川に滅ぼされるのだが。

(朗読)「松浦鎮信、大村喜前、有馬晴信らは唐津の寺沢広高と協議して、ひそかに家康側につくことを決めていた。(中略)かつて信仰を共にして朝鮮の寒さと飢えのなかでセスペデス神父のミサを共にあずかった第一軍団の同志と行長は闘わねばならない」<sup>22</sup>

皆々に伝えるとすれば、「人間は裏切る」。この時は拙者も複雑というか、心底暗くなったことを覚えている。同じ仲間だったのに、徳川家康に騙されて行ってしまう。そして拙者は、大事にしていた仲間と斬りあわねばならぬ。大國先生は、裏切られたことあるじゃろう？ 皆々も生きて行けば裏切られ

---

<sup>22</sup> 遠藤周作『鉄の首枷 小西行長伝』（中央公論社、1977）

ることがあるが、人間とはそういうものだと思えば少しは違う。ただ、拙者はとても悲しかった。

1番最後に、六条河原で拙者が首を斬られた後、宣教師たちが遺体を教会に連れて行ってくれた。拙者は着物の衿に妻子にあてた手紙を隠しておった。この手紙が拙者の人生で1番だったと思う。ただ、当世に残っている手紙の写は、もともと拙者の時代の言葉で書いたのを、宣教師がヨーロッパの言葉に訳して、それをまた当世の日本人の人にわかるように訳したので、少々違和感もある。なあ、佐島殿？（仰せのとおりです）

しかし、この手紙の朗読を皆々には聞いて欲しい。

（朗読）「今回、不意の事件に遭遇し、苦しみのほど書面では書き尽しえない。落涙おくあたわず。このはかなき人生で耐えられる限りの責苦をここ数日来しのできた。今や煉獄で受くべき諸々の罪を償うべく、苦しみぬている。自分の今日までの罪科がこの辛い運命をもたらしたのは確かである。されど身にふりかかった不運は、とりもなおさず神の与えられた恩恵に由来すると考え、主に限りない感謝を捧げている。最後にとりわけ大切なことを申しのべる。今後はお前たちは心をつくし神に仕えるよう心がけてもらいたい。なぜなら、現世においては、すべては変転きわまりなく、恒常なるものは何一つ、何一つとして！見当たらぬからである」<sup>23</sup>（原文の「何一つとして」を朗読では強調）

これが拙者の生涯最後の手紙の内容だ。ごく簡単に言えば、この世には定まったものはない、常に移り変わっていく。ただ、真理はある。だから変わらない神にお仕えせよ、ということ传达了かったのだ。ただ一言、キリシタンで大名の拙者が最後に行き着いた境地だと聞いて欲しい。

今日は皆々、拙者と話をして心を通わせてくれたこと、かたじけない。遠藤先生の書かれた内容と拙者の思いとを合わせて、また考えてもらえれば実に嬉しい。姫たちはどうか健やかに学びを続けられたい。今日は皆々大儀で

<sup>23</sup> 同上

あった。（以上）

武将小西行長に会って、『鉄の首枷』の読みに変化があったかについて、学習者たちは以下のように記述している。

「小西行長様から東軍について理由を聞いて、『鉄の首枷』における小西行長の生き方の印象が変わりました。損得だけではどうにもできず、義理だけでも動けず、両方合わせて戦わなければならない時代に小西行長が生きていたのだなと思いました。」

「その時代支配していた人たち、秀吉、家康などどう国を支配していくか、利用できる人は利用する考え、とてもシビアナ時代だった感じました。本を読むと客観的にとらえていたが、実際にその場に行くと、ここでは、こういうことがあって～、など実感できました。遠藤周作は小西行長を否定とかそういうのではなく、小西行長を一人の人間としてみていると思いました。小西行長について書かれている証拠は少ないが、…だろう、こうだったに違いないだろうと、遠藤周作が小西行長の気持ちになっていて、気持ちが伝わりました。」

「ツアー前は教科書を読んでいるようであまり入り込めなかったのですが、ツアーで小西様の話をきくと小西行長の心情とかを自分なりに想像出来て、ツアー前と後では同じ文章でも受ける印象がだいぶ変わりました。」

「小西様が自身の話をしている際、『鉄の首枷』をあらためて思いなおした時、読みが変わるのではなく、この人物の人生のいざいさを感じました。キリシタンの生活など事こまかく分かった気がします。」

「会って話をきいたら踏み込めた。『鉄の首枷』は客観的にみて書いている物語だったけど、実際に行って、小西行長様から話をきいて、納得がいく物語だったなと感じました。」

「話の中にある争いの出来事や残酷な仕打ちについても自分の中で現実味を帯び、小西行長や殺された多くの人々の苦しみを想像することができまし

た。生々しく想像してしまったため、斬られるわけでもないのに首がむずむずし、思わずさすってしまうほどでした。本で読んでいただけではここまで感じることはできなかつただろうと思います。」

「小西行長に話してもらったとき、キリスト教に対する厳しい世間からの批判はわたしが想像していたよりもつらいものだったのかと思いました。現代では信仰の自由などで個人の自由の考えが広まっていますが、当時は自分たちとちがうものを“畏怖”の念を抱いて、迫害する考え方が強かったと思います。その中でもキリスト教を信仰し続けて、仲間のキリシタンを守るために懸命に戦った小西行長はとても勇気があるし、カッコいいなと感じました。」

「最初に（行く前に）読んだ段階では、小西行長の悲しい生涯が書かれた作品だなーと感じていたのですが、小西行長の話を直接聞けて、その生涯に隠された行長の思いなど見え難かった部分が見えてくるようになり、とてもイメージしやすくすっきりと入りこんできました。遠藤周作のどの作品も歴史がベースになっていて、とても難しい印象があるのですが、実際舞台となった場所をまわったり、小西行長に会ったりしてみて、ベースは歴史だけど、はっきりと登場人物の心情が描けていて、ここでこんな事があって、こんな思いがあったんだろうなーとイメージしやすくなった。歴史も少しだけ学んだ気がする。」

「小説だけだとむずかしく感じたけど、今でも会っているように石田三成の名前や武將を名前を出していただけたので、本当にあったことだったと現実味が出てよかった。一つ一つの小説がむずかしくて、理解し辛さがあったけど、実際に会って質問に答えてもらったりしていると、遠藤周作が作品を作り上げるためにすごく深くまで調べられていて、すごさが伝わってきた。」

「小西行長が堺の町をとても愛していたことが実感できた。また行長が「水の人間」と書かれていたように商人で堺の町で貿易を行っていたことが詳しくわかった。加藤清正と仲が悪かったことや徳川家康などが嫌いだったことがわかり、戦国武將の関係が詳しく分かった。そのため小説のことがリアル

に伝わってきた。他にも小西行長の「切支丹である」という独特のプライドのようなのが伝わってきて、小西行長はキリスト教を本当に大切にしていたと思った。」との記述も見られた。

『鉄の首枷』は、『銃と十字架』よりも歴史史料が多用され、小説というより評伝である。歴史学においても小西行長研究書は本書発表時に少なく、キリシタン史研究者から提供された未刊行史料が多く紹介された本書は、小西行長関連史料総覧として利用されるほどであった。そのため学習者にとっては歴史教科書のような文脈を土台として描かれるキリシタン大名の文学的テーマを読み取ることに慣れなかったようである。

しかし武将小西行長が「自身と周囲の人々の生きた経験」として語った時、学習者は「ある時代を実際に生きた人間」から自分自身に訴えかけられた様子が見られた。作家はただの歴史叙述をしたのではなく、現代人と通じる人間の悩みや葛藤や辿り着く境地を描いた文学作品であることを感じ取ったものである。最近の若い学習者にとっては20世紀を想像することも難しいため、キリシタン迫害についてのイメージはさらに持ちづらい。武将が歴史小説を解説することによって臨場感と共感が生まれ、それをベースに想像力を鍛えられ、少数者への恐れから迫害に転じた時代があったこと、迫害に抵抗できる人間の尊厳を感じるほどに読み取り方が成長した。さらに、その文学世界への没入が、身体的な影響（首を斬られるようなむずむず感）までも作りだす力を持つと知ったのは、武将による自分語りはまだまだ深まる可能性を実感した。

文献史学者としては日常的には文字情報から人物像や社会像を構築するのであるが、あくまでも歴史的人物としての言動しか見せない武将という存在を前にすると、文献史料の解釈が変わるのを肌で感じる事ができた。特に、秀吉の宣教師追放令における行長の対処法、加藤清正との軋轢の理由について新しい解釈を示唆され、文献史料と組み合わせて論ずることができたのは実に幸いであった。

## まとめ

本フィールドワークでは、文学の場とその舞台とを〈音〉によって立体的に重ねあわせ、身体的な蓄積や場所の歴史性などを臨場感をもって体験する活動をおこなうことができた。小説を読み、武将小西行長の〈声〉に耳を傾け、現場性をもって対話的に思考することにより、学習者たちは、自身の読みを深めることででき、また、歴史に身体性をもって触れ、その土地の〈観光〉の在り方について考えるための足掛かりを得ることもできたと言えるだろう。

また、武将が次に何を語り、どう答えるかわからない一種のライブ感、あるいはタイムスリップ感により、一層緊張感のある現地での思索ができたことは大きな収穫であった。

武将小西行長が原城跡を、「拙者の家臣の息子の天草四郎」が指揮した地と紹介し、「人は領主に年貢を搾取されて野垂れ死ぬだけの弱い存在ではなく、多くの人々と心を合わせて幕府と戦って自分たちの尊厳を示した現場」と解説したことと、遠藤周作の作品が重なり合って、臨場感が深まった。その武将に案内されて現地を細かく踏査したことにより、天保期に近隣の人々が天草四郎を神道式に祀った意味への気づき（江戸後期の人々はキリスト教式の鎮魂を知らないで、神式で祀ったことが理解された）があったことも貴重な経験であった。

熊本城おもてなし武将隊は、第一義的には熊本・九州・日本の観光活性化のために活動しているが、彼らは歴史的人物として俗説と史実を厳密に区別し、甲冑も甲冑師制作の本物を身につけ可能な限り史実への接近を努力している。しかし場合によっては俗説であることを明らかにした上で「面白く」聞かせる話術も持ち合わせている。その意味で、武将たちの文学作品や歴史文献の読み方は非常に深く、文学・史学研究との相性がとても良い。今後の大学教育でも期待される存在だと考えられる。本稿が文学―観光―歴史を有機的に、そして鮮烈につなげ、そこにかかわる人の思考を深めてゆく教育活

動について考えるための一助となることを願い、擱筆する。

#### 【付記】

本稿作成にあたっては、熊本城おもてなし武将隊事務局にご配慮いただき、本学の田中英資先生に同行写真撮影の労をとっていただきました。記して感謝の意を表します。熊本城おもてなし武将隊事務局のみなさま、武将小西行長さま、田中英資先生、有難うございます。